

---

思想と科学の間で  
学術研究で人間と社会を読み解く

---

## 菜食主義を考える

——倫理はいかにして成熟するのか

---

京都大学大学院助教  
川端祐一郎  
Kawabata Yūichirō

---

### 動物の権利

二〇〇八年にアメリカで、史上最大規模と言われる約七万トンの牛肉製品リコール事件が起きた。とある食肉メーカーが、「へたり牛(ダウナー)」と呼ばれる歩行困難な牛に対して狂牛病の検査などをせずにそのまま出荷していたのが違法であるという話なのだが、元は動物愛護団体による肉牛虐待の告発がきっかけであった。屠殺場の労働者によって撮影された暴露映像をみると、自立できずに「へたつて」いる牛が作業員に蹴飛ばされたり、眼を棒で突かれたり、フォークリフトで突き上げられたりしており、確かに憐れな姿である。そしてこの「非人道的な取り扱い」の咎で、同メーカーには動物虐待事件として史上最大の罰金支払いが命じられた。

「虐待」として事件化される事例は多くの人々の注意を引くのであるが、そもそも食肉用の畜産は動物の殺害を予定

して営まれているのであり、また工業化された現代の畜産業では効率化のために、動物たちは極めて不自然な管理の下に置かれているのが普通である。そこで「動物の権利」への配慮を唱える論者たちは、飼育場や屠殺場において家畜が「人道的」に取り扱われるよう訴え、その一部は倫理的な使命感から菜食主義を主張している。

この「動物の権利」というものは、倫理上の問題の中でもとりわけ明快に論ずることが難しいものの一つである。屠殺や解体の様子を目の当たりにして不快感を催す人は少なくなく、小さな檻の中で自由を奪われた家畜の姿には憐れみや同情を覚えるものだ。しかしその一方で、先進国では国民の九割以上が動物の肉を平然と常食しており、そのために日々夥しい数の家畜が、野生動物に比べれば極端に短い生涯を終えている。

## 増加するベジタリアン

倫理学者のP・シンガーは一九七五年に出版しその後改訂を重ねている『動物の解放』の中で、動物実験や畜産における「非人道的な取り扱い」の事例を膨大に挙げながら、その改善を訴えている。シンガーは倫理学者としては珍しく「功利主義者」を名乗っており、彼の「動物の権利」論も功利主義の原則を動物にまで拡張することによって構成されている。つまり、苦痛が苦痛であることの意味は人間においてであれその他の動物においてであれ大差ないのであり、苦痛の抑制と快楽の増進を目標とする功利主義者ならば、動物の苦痛を人間の苦痛と同じように気かけなければならぬというわけである。

そしてこの論理の延長でシンガーは、肉食は肉食よりも倫理的なのだと言張する。功利主義の立場からは苦痛の量が問題となるので、苦痛を催す「感覚」を持たない（と言えるのかどうか確証はないが）植物は、食べても問題がないらしい。また、肉食の習慣を即座に捨てることができないとしても、肉食の需要を減らすことや、動物に与える苦痛の大きい飼育・屠殺方法をやめさせることは、功利主義的に正しいのだとされる。こうした運動の甲斐もあって、先進各国ではここ半世紀ほどの間に動物虐待を禁ずる法整備が進められ、家畜の取扱いがある程度残酷さを減じたものと

なった。

ベジタリアンはここ二、三十年で数倍に増えたと言われている。幅もあるがいくつかの調査結果を総合すると、日・米・英・独・豪などの各国では現在、あらゆる動物性食品を拒否するヴィーガンが一%前後、そして卵や魚などを許容する人を含めた広い意味でのベジタリアンは数%から十%前後存在するようだ。

彼らが肉食に傾倒したきっかけやそれを継続している理由についても、様々な調査が行われている。P・ロジンらが一九八七年にペンシルバニア州のベジタリアン一一九名に対して行った調査では、初めて肉食を実践し始めた時の理由として、「動物に苦痛を与え、殺し、彼らの権利を侵害することの倫理上の問題」を挙げた人と、「肉食が肉食よりも健康に良いこと」を挙げた人が、ともに二〜三割ずつ存在していた。また二〇一九年にD・L・ローゼンフェルドらが英語圏のベジタリアン数百名を対象に行った複数回にわたる調査では、三〇%弱が動物の権利、四〇%が自身の健康、五〜六%が環境への影響を、肉食を実践する理由に挙げている。

## 肉食主義の批判的意義

「主義」にまで高められた肉食には不自然なところが多く

つもあるし、菜食化の理由で一、二位を争う「動物の権利」という理念も簡単に腑に落ちるものではない。ただそうは言っても、ほとんど身動きの出来ない特殊な檻に囚われ、若くして屠殺される動物に憐憫を覚えるのはごく自然な感情であり、ペットが家族の一員と化して人間並みの権利が与えられるのも珍しいことではない。菜食主義を社会規範とすることに同意はできないまでも、その心情が理解できないわけではなく、また菜食の思想が現代の食文化に対し批評的意義を持つことは認めざるを得ない。

菜食主義者が言う通り、生命にまつわる我々の倫理観がさして一貫したのではなく、多分にご都合主義的であることは間違いない。B・バステイアンらが二〇一二年に行った実験では、人間はある動物が「食用」であると知らされると、その時を境に、彼らが精神を持った動物であるとは考えなくなる傾向があることが分かった。つまり我々が動物の生命に認める尊厳は、実利的な都合によって簡単に抑圧されたり無視されたりするものなのだ。

菜食主義者は「より残酷でない飼育・屠殺方法」を求めるが、これに「どうせ殺して食べるのだから同じだろう」と感じるわけにはいかない。その種の現実主義は、生死の意味を過度に一般化している点で、「全ての命が等しく守らるべき」という理想主義と同様の短絡を犯している。生の

価値や死の悲哀はあくまで具体的なもので、一様ではないのだ。

また菜食主義者の主張には、我々現代人が、日々口にする食糧の由来についてあまりに鈍感であることに對する警告としての意義もある。工業化された畜産は、人間が他の動物の殺戮の上に生活と文化を築いているのだということや、直接目の当たりにすれば多くの人が嫌悪感を覚えるような飼育方法が生産効率のために採用されているという事実を見えにくくする。合理的な「工場畜産」やグローバルな「アグリビジネス」への依存を短期間で解消することは難しいにしても、自分の食べているものの由来を直視することは重要であろう。自分がどのようにして生きているのかを知らずに、どのように生きるべきかを考えることは困難だからだ。

#### 信条を捨てた人々

心理学者のH・ハーツォグは「わたしたち人間の、他の生物種に對する考え方は、往々にして理屈では説明できない」と言うが、その通りである。菜食主義者を名乗りながら、魚類や鳥類を食べることを疑問に思わない人は多い。闘鶏がその残酷性を理由に禁止される一方で、毎年何億羽ものブロイラーが合法的に殺されている。年間百万匹の犬

が食用に供される国で、百万人以上がペットの犬を可愛がっている。確かにそこには論理の一貫性は無いように思える。

ただそもそも倫理観というものは一般に、論理的な意味で明快でも安定的でもなく、だからこそ科学や哲学がいくら洗練されても我々は一向に悩みから解放されないのである。そこで知る必要があるのは、論理的な一貫性や普遍性とは違う形で倫理観を洗練させる道もあるということである。そのためには菜食主義の信条を捨てた「元ベジタリアン」の経験がちょっとした参考になる。

K・メンジーズらが二〇一二年に、一九名の元ベジタリアン(と二五名の現役ベジタリアン)に対するインタビュー調査を行った。彼らが菜食をやめた主な理由は、「食をめぐる家族や友人との諍い」「菜食の準備に要する手間と費用」そして「体調の悪化」であった。菜食そのものは、丁寧に実践すれば肉食に比べて健康に良いことがいくつもの研究で明らかになっているが、安易に肉・魚・卵・乳製品を取り除いただけでは、カルシウムや鉄分やビタミンが不足したり、消化器官が過敏になったりする。また、ベジタリアンはもともと神経症傾向を持った人が多いとも言われ、その性格と偏食が複合することで摂食障害などを引き起こし、病弱になるベジタリアンが少なくない。鉄分の不足により

貧血が慢性化している人もいれば、過食と拒食を繰り返す人もいる。

そのため菜食から肉食に復帰する人も多く、アメリカでは元ベジタリアンが現役ベジタリアンの三倍存在するとも言われる。いくつかの事例報告を読むと、十年、二十年にわたって慢性的な心身の不調に苛まれていた菜食主義者が、医師の勧めと自らの決断によって肉食に復帰すると、短期間(早い例ではわずか四十八時間)で劇的に健康状態が改善していることが分かる。

#### 「論理的一貫性」と「物語的調和」

馬鹿げた話のようにも思えるが、一度抱いた強い道徳的信念を葛藤の末に放棄した人々の経験には、独特の重みがあるのも事実で、ハーツォグは興味深い事例をいくつか紹介している。

十代の頃に「痩せられる」と「倫理的に正しい」との魅力に取り憑かれ、厳格な菜食主義者になったある女性は、貧血・疲労・腹痛が慢性化し、十二年後に肉食を再開した。今では農場で豚を飼い、自らの手で屠殺することもある。彼女は、可愛がって育てた豚を殺して解体することに複雑な気持ちを抱いているが、それを克服するのに必要なのは動物の生命に対し「畏敬の念」を持つことだと言

い、「自分で動物を殺してみたほうがいいのかも。なぜかしら。そこまでしてひとまわりなの。責任を引き受けることが、恐怖をやわらげる薬になるのよ」と語っている。

また別の元ヴィーガンは、定期的に鉄分を注射しビタミン剤を服用していたが、ひどく病気がちであったため医者アドバイスで肉食を再開した。菜食主義者が動物食に復帰する際、当初は乳製品や卵、あるいは鶏肉や魚を対象を限定する場合が多いと言われるが、この元ヴィーガンは「ニワトリや魚だけを食えるのは偽善的だと思った。それも牛や豚と同じ動物であることには変わりない。だから、肉を一切食べない生活をやめて、あらゆる肉を食べるようになった」と語る。

元ベジタリアンが肉食を絶ち始めたのは学生時代であるケースが多いようで、それは素朴な道徳的衝動に駆られて学生運動に身を投じるのに似ているのかもしれない。そして単純な倫理原則のみでは現実には立ち向かえないことを知るとともに、「宗教的な畏敬の感覚」や「偽善に対する警戒心」を持つことを学び、心身の健康を取り戻す。「この「ひと

まわり」こそが倫理というものの本質ではないだろうか。

理念と現実の間の葛藤は、「論理的」に解決されるものではない。我々にできるのは、原理を貫くことの難しさを生活の中で身をもって味わい、社会の習慣と自分の流儀に則って、その矛盾を引き受けることだ。そしてその過程が一つの物語として調和している時に、我々は倫理観というものの真の洗練や成熟を見るのである。

〈主要参考文献〉

- P・シンガー『動物の解放 改訂版』人文書院、二〇一一年  
ハロルド・ハーツォグ『ほぐらほぐらでも肉を食う』柏書房、二〇一一年  
Rozin, P. et al. (1997). Moralization and becoming a vegetarian: The transformation of preferences into values and the recruitment of disgust. *Psychological Science*, 8(2), 67-73.  
Menzies, K. et al. (2012). The process of exiting vegetarianism: An exploratory study. *Canadian Journal of Dietetic Practice and Research*, 73(4), 163-168.  
Bastian, B. et al. (2012). Don't mind meat? The denial of mind to animals used for human consumption. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 38(2), 247-256.  
Rosenfeld, D. L. (2019). Why some choose the vegetarian option: Are all ethical motivations the same? *Motivation and Emotion*, 43(3), 400-411.